

共学の寺院学校の様子。ミャンマーでは就学率は上がる一方で、  
貧富による教育の格差が顕著となっている。

# Republic of the Union of Myanmar

EARTH GALLERY Vol.146 [ミャンマー連邦共和国]

地球ギャラリー  
写真文・川畑嘉文ライター・ナリス

# 未来を守る寺院学校



尼僧学校の授業中。頭を丸めているのは出家した少女たち。



筆者を見て珍しい外国人が来たとき、児童たちは大はしゃぎ。



托鉢中の尼僧学校の少女たち。喜捨された食料は彼女たち自身の食事となる。



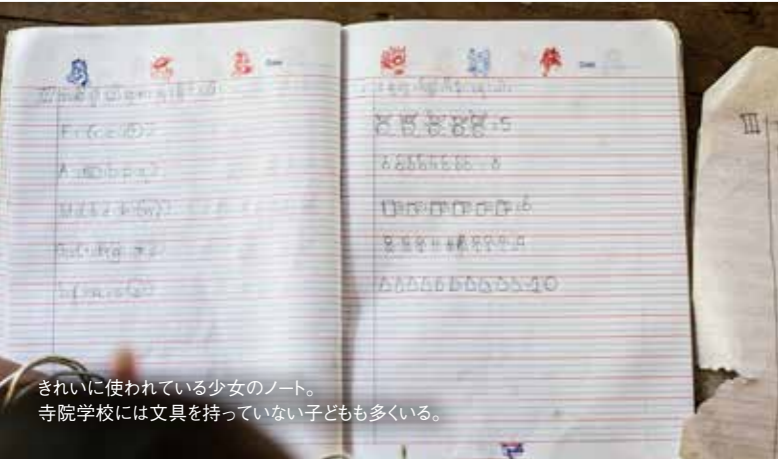
寺院学校の朝は全児童そろってのお祈りから始まる。



未就学児の世話は上級生の役割。この子たちの多くは親がいないためお寺で暮らしている。



尼僧学校では自分たちで食事を作る。それも教育の一貫だ。



きれいに使われている少女のノート。寺院学校には文具を持っていない子どもも多にいる。



放課後、お気に入りのお菓子を買う。日本でもミャンマーでも子どもたちは駄菓子店が大好き。



授業中だったが、少女がこちらに最高の笑顔に向けてくれた。



共学の寺院学校のひとこま。  
ミャンマーでは学年の最後に試験があり、落第すると進級できない。

まだ朝の7時過ぎだというのに日差しが強く汗が止まらない。通りでは、靴を提げた子どもや白シャツを着込んだ大人たちが足早に過ぎていく。そんな中を、桃色の袈裟を着た少女たちが列をなして進んでいった。ときおり足を止めると、少女たちが持つ鉢の中に在家が米などの食料を入れていく。

ここは最大都市ヤンゴンから北西へ車で6時間ほどのバゴー区ピー県市内。少女たちはミヤティンギ寺尼僧学校の子どもたちで、授業がない日は早朝6時から11時まで托鉢を行う。喜捨が少ないときは一日中続けることもあるそうだ。

彼女たちが所属する寺院学校は、その名の通り寺子屋のようなもので、出家した子どもや家の都合で公立学校に通えない子どもたちにも学びの場を提供する。ミャンマーの公立学校は基本的には無償だが、制服が定められているうえに学用品などもそろえなければならぬから貧しい家庭の子どもたちには通学が難しい。また、地域によっては公立学校がないために、近場にある寺院学校に通う子どもも多い。

ミャンマーには1500以上の寺院学校があり、生徒数は21万2000人にも及ぶ。入学希望者は増えているが、喜捨に頼る寺院学校の運営は苦しく、教育の質を保つために受け入れを断らざるを得ないケースもある。

寺院学校の特徴は、多くが宿舍を併設

していることだ。ミヤティンギ寺尼僧学校には1年生から8年生（小・中学まで）153名が学び、その中の約100人が宿舍で暮らす。校長も寝食をともにし、子どもたちに寄り添って生活を送っている。そんな校長が信頼を寄せているのが、勉強熱心なだけでなく強い責任感を併せ持つ生徒会長のウイラティさんだ。

ウイラティさんはタイ国境に近いカレン州のミヤワティ出身。両親の離婚後、母と一緒に母方の祖母宅で暮らすようになったが、小学校から遠く離れ、通学が不便になってしまった。勉強が追いつかないうえに病気を患い2年生の最終試験が受けられず、結局小学校を退学し祖母の果実畑で手伝いをしてきた。そんな頃、近所にある寺の尼僧にミヤティンギ寺のことを教えてもらい、祖母に思いを伝えて7歳で出家を決めた。

幼い頃に親元を離れた彼女。この尼僧学校にはシャン州の子どもが多いから、言葉や習慣が異なるカレン族の彼女にとって毎日は孤独との闘いだっただろう。ここに來てから一度しか母親と会っていないという彼女は「寂しい時期はありましたが。そんなときは大好きな絵を描いて過ごしていました」と言う。勉強もせず

に絵ばかり描いていた「指を切り落としてしまっわよ！」と校長先生に叱られたそうだ。「それからは勉強にも集中するようになりました」と照れ笑いを見せた。

「生まれた環境によって勉強ができないのはおかしい」と言うのは同寺のザヤワティ校長だ。修行時代托鉢で郊外の村々を巡っていた彼女は、貧困が原因で学校に行けない子どもたちをたくさん見てきた。そんな経験から尼僧学校を開設したのだ。校長にとって子どもたちはわが子のようでもあり、ときには姉妹のような関係でもあるという。知識や知恵を授けるだけでなく、悩みごとがあれば相談にのる。時には子どもたちに意見を求めることもあるそうだ。上座部仏教では出家した僧の結婚は認められないから家族を持つことはできない。だけど校長は「私は大家族を持つっていいわ」とほほ笑んだ。

無限の可能性を持つ子どもたちが存分に教育を受けることができ、自由に将来を選ぶことのできる環境がすべての社会で求められる。もうすぐ中学を卒業するウイラティさんに将来の希望を尋ねると、「まだ決められないけれども、どう進んでも最大限の努力をするだけ」と話した。その目は厳しい現実を突き進んで行く強い意志で輝いていた。

川畑嘉文(かわはた よしふみ)  
フォトジャーナリスト。ペンシルベニア州立大学卒業。ニューヨークのニュース社勤務時代に9・11を取材し写真を始め。2005年にフリーランスとなり、世界中の難民キャンプや貧困地域、自然災害の被災地などで取材を行い、雑誌や新聞などに寄稿している。著書に「フォトジャーナリストが見た世界―地を這うの仕事―(新評論)。12月には次の著書出版予定。

取材協力：SVA(シャンティ国際ボランティア会)



左：学校が終われば子どもたちは遊びに夢中になる。この後は一生懸命宿題に取り組んでいた。中：どこの国でもサッカーは少年たちにとって人気のスポーツだ。右：授業の合間に保護犬の世話をするウイラティさん(手前)。